二〇二一年度

晃華学園中学校

第三回 入学試験問題

【国語】

時間：五〇分
配点：一〇〇点

答えはすべて解答用紙に記入すること。

問題は次のページから始まります。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。両親が離婚した後、トーコは小説家の母と暮らしていましたが、その後母を病気で亡くしてしまい、今は祖父母と一緒に暮らしています。ある日曜日の夕方、切らしていた夕食の材料を買いに行きますが、店の前で気が変わって、同級生の穂香の家に向かいます。

金曜日の給食の時間、穂香に気持ちをぶつけてしまってからずっと、わたしの心はどんよりと①曇っている。

わたしが悪いのはわかっていたのに、あやまることができないまま、週末を迎えてしまった。昨日の千紘ちゃん（＝トーコの叔母）との買い物の間にも、ちらちらとそのことを思い出しては、気持ちが重くなっていた。

穂香とは、小学校から長い時間を一緒に過ごしてきた分、ケンカをしたことは何度もあった。だけど、こんなに自分の言ったことを後悔したのは初めてだ。

できれば月曜日になる前にちゃんとあやまっておきたかったのだけれど、思い切って押したインターフォンに返事はなかった。駐車場に車がAないから、きっと家族で出かけているのだろう。

がっかりしたような、少しほっとしたような気持ちで引き返し、児童公園の前にさしかかった時、後ろから誰かの足音が近づいてきた。

わたしの歩調よりもずっと速くて、どんどん背中に迫ってくる。

くっ、と息が詰まった。

このところ校区内での不審者情報が相次いでいて、学校でしつこいくらい注意されている。

周りには誰もい②ない。住宅街のどの家も、ぴっちりと玄関の扉を閉めていて、たとえわたしが悲鳴を上げても、そこが開くことはなさそうだ。

とにかく逃げよう。足の速さに自信はBないけれど、闘って勝つ自信はもっとないから、もうふり切るしかCない。

そう思いながら地面を強く一歩だけ蹴った時、

「……セ……ヒロセ」

と、背中から吹く風に、わたしの名前が混じって聞こえた。

「ヒロセトーコ！」

「ひえっ！」

「逃げんなよ、ひと筆書き（＝北沢がトーコに付けたあだ名）」
おそるおそるふり返ったら、そこには北沢が立っていた。体を前に倒して両手で膝を押さえ、息を整えているようだ。
「やだ、やだやだ、もう、びっくりさせDないでよ、不審者かと思ったじゃない」
「いやっ、なんで、不審者が、名前を知ってると、思うかなっ」
北沢の息は、まだ切れている。
「だって、突然現れたから」
「ああ、それは、ごめん」
「まあ……いいけど。それより、何してんの？」
「自主トレ、週末はいつもこの辺を走ってるんだ」
北沢はやっと体を起こし、普通にしゃべった。そういえば北沢の家は、穂香の家から一〇〇メートルくらいしか離れていない。
へえーと素直に感心していたら、北沢はわたしを追い越して児童公園の中へと入って行く。
「オレ、ちょっと休憩するよ」
黙ってその後ろ姿を見ていたら、北沢はふり返り、
「休んだら？　広瀬も」
と言う。
休むも何も、わたしはただ歩いていただけなのだ。それに、急に家を出て来たから、着古したグレイのカットソーにデニムというひどい格好で、恥ずかしい。
まあしかし、せっかく誘ってくれているのだからと思いなおした。
その公園は小さくて、木製のベンチ、ジャングルジム、そしてブランコしか置かれていない。座るとしたら、ベンチかブランコだろうと思うのだけれど、北沢はなぜかジャングルジムに登り、そのてっぺんに腰かけた。
しかたなくわたしも登り、一段下に座った。
③やさしい風が、ふわっと吹いた。
「広瀬、どこかに行く途中だった？」

「ううん、穂香に用があったんだけど、留守だったから、帰ろうとしてたとこ」
「ふうん。仲いいよな、広瀬と倉田って」
「うん……でもわたし、今はちょっと」
「え？」
「金曜日に、穂香に意地悪なことを言っちゃって、それをあやまろうとして行ったの、穂香んちに。でも留守だった」
「はあ」
北沢は、とくに興味もなさそうで、それ以上何も聞いてこなかった。だけど、わたしはもっと話したくなった。
「穂香、こないだ絵画コンクールで金賞とったでしょ？　わたし、ちょっとうらやましいっていうか、なんか、素直に喜んであげられなかったんだ。それに、自分のことで頭がいっぱいだったから、いろいろ話しかけてくる穂香がうっとうしくなって、八つ当たりしてしまって」
「倉田って、金賞とったの？」
「とったじゃん。先生もそう言ってたし、新聞にも載ってたよ」
「へえ、そうだっけ」
わたしは「そうだよ」と、ちょっと強い口調で言った。
自分は、穂香の受賞に複雑な気持ちになったくせに、それを知らないと言われると、なんだか腹が立った。穂香はすごいんだよ、すごく上手に絵を描くんだよ、穂香には才能があるんだから、と大声で言いたくなった。
「北沢も、新聞に載ったことあるよね。県大会で新記録を出した時。全校集会で表彰されたし」
「うん」
「すごいよね、わたし、一度もそんなことないよ。読書感想文も、絵もスポーツも書道も音楽も、得意なことなんて全然無い。なんにも無いんだ、わたしには」
そう言うと、北沢は不思議なものでも見るみたいにじっとわたしを見つめて、
「④半紙くれたじゃん」
と言った。

「はい？」
「小学生ん時、オレ、何度も広瀬に半紙もらったよ。習字の時間、ほら、オレんちって母さんいなくて父さんだけだから、半紙とか絵の具とかを切らしても、なかなか気づいてもらえないんだよね。買っといてって言っても、父さんすぐに忘れちゃって。まあ、オレ自身も忘れちゃうんだけど。で、授業中に半紙がないことに気づいて、やべえやべえって思ってたら、いつもすっと机に置いてくれたんだ。あ、もちろんオレだけにじゃなくて、みんなにそんなふうにしてたよな、広瀬」
そう言えば、そんなことがあったような気がする。北沢にお母さんがいないのは、いつからか知っていたけれど……。
「そんなつまんないこと、何年も覚えててくれたの？」
「オレには、つまんないことじゃなかったよ。あの時、すごく助かったし、嬉しかったから。絵の具だって何度も借りた。そのまま返してなくて、ごめんな」
「いや、いやいや、そんなのいいよ」
「だから」
「だから？」
「なんにも無いなんて、思うなよ」
北沢はそう言うと、弾みをつけてジャングルジムから飛び降りた。
それからぐんっと伸びをして、そのまま何事もなかったかのように、公園を走り出て行ってしまった。
なんだあれ、と思いながらわたしも地面に下りて歩き出すと、北沢が走って戻って来た。そして、
「帰り道、気を付けて」
とだけ言うと、今度こそ本当に行ってしまった。
北沢の背中を包む夕暮れの空気は、淡いラベンダー色で、それはママが受賞式の写真の中で着ていたスカートの色そっくりで、なぜだかわたしは泣きたくなった。
「おはよう」
月曜日の朝、穂香の家の前で待っていたわたしは、玄関から出て来た穂香に駆け寄った。

小学生の時には毎日一緒に登下校をしていたけれど、中学校に入ってからは別々に行っていたから、穂香はちょっと驚いたようだった。

「どうしたの？」

穂香の声は、冷たかった。いつもなら「わあっ、おはよう」と言うのと同時に丸い目を三日月のカタチにして笑うのに、その日はそのまま歩き始めた。

二、三歩遅れて、わたしは穂香のあとを追った。

「ごめん、穂香」

声をかけても、穂香は⑤ふり返らなかった。ただ、

「何が？」

と、わかっているはずのことを聞いただけだ。

「金曜日のこと」

「……」

「ほんとにごめん」

そう言うと、穂香はようやく立ち止まって⑥ふり向いた。わたしも足を止めると、穂香は、

「あのさー」

と言って、わたしをまっすぐに見た。

「トーコの気持ちを考えずに、へらへらしゃべってたわたしも悪かったと思うよ。でもトーコ、何も言ってくれないんだもん。部活に戻らない理由とか、家のこととか、何か⑦悩んだり気になることがあったりするなら、話して欲しいよ。あんなふうに突然キレられたら、わたし、どうしていいかわかんなくなる」

いつもはベビーピンクの頬が、今はただ白いばかりに見える。わたしは、穂香から目をそらさないまま、

「うん、わかった」

と頷いた。⑧胸がドキドキ鳴っていた。

「ほんとに？」

「うん」
「じゃあ、もうしません、は？」
「はい。ごめんなさい、もうしません」
わたしが大げさに頭を下げると、ようやく穂香は「ふっ」と笑った。わたしの体から、力が抜けた。
「もういいよ、行こう」
そう言った穂香に、わたしは追いついて並んだ。そして、
「……あのね、悩んでたのはパパのこと。こないだパパから電話があって、わたしに会いたいって言い出して……」
と話し始めると、穂香は、
「ちょ、ちょっと待って」
と、両掌をわたしに向けた。
「その話、思ってたよりヘビーな気がする。心の準備するから、ちょっと待って」
「えー、穂香が［　　］って言ったんじゃん」
「そうだけど……。うん、そうだ、［　　］」
そうして穂香に話してみると、ほんの少しだけ、気持ちが軽くなったような気がした。

（中山聖子『その景色をさがして』）

問一　――線部①「曇っている」とありますが、「トーコ」の心が曇っている原因としてふさわしくないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　自分のせいで穂香とケンカになったこと
イ　穂香に早く謝らなかったこと
ウ　穂香にひどい言葉をかけたこと
エ　穂香の家を断りなく訪れたこと

問二　――線部②の「ない」について、これと同じ性質の「ない」は、～～線部A～Dのうちのどれですか。最も適当なものを一つ選び、A～Dの記号で答えなさい。

問三　――線部③「やさしい風が、ふわっと吹いた」とありますが、これはどのようなことを表していると考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　ジャングルジムに座らされたトーコの不満な気持ちが、時間の経過とともに和らいでいったこと

イ　悩んでいるトーコを助けたいという北沢の思いが、無意識のうちにトーコに伝わっていたこと

ウ　トーコと北沢のいる場が穏やかな雰囲気に包まれて、自然な気持ちで北沢と話せる状態になったこと

エ　北沢が服装を気にしていないことがわかって安心し、風を感じる心の余裕がトーコに生まれたこと

問四　――線部④「半紙くれたじゃん」とありますが、「北沢」はどういうことを言おうとしているのですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　トーコは人を責めない優しさを持っているのだから、誰にも褒められないと思う必要はない、ということ

イ　トーコは半紙をたくさん用意してくれたのだから、何も持っていないと思う必要はない、ということ

ウ　トーコは誰にでもさりげなく親切にできるのだから、とりえがない人間だと思う必要はない、ということ

エ　トーコは授業中に北沢の忘れ物に気づいたのだから、気配りができないと思う必要はない、ということ

問五　――線部⑤「ふり返らなかった」から――線部⑥「ふり向いた」までの「穂香」の心の動きはどのようになりますか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　トーコの方から怒りをぶつけておいて、急に謝られてもすぐには許せない。でも私にも言わせてほしいことはあるから、とにかく言葉をかけてみよう。

イ　トーコに何を言われたかなんて、もう全然気にしていなかった。何でそこまで必死に謝ろうとしているのか知りたいから、トーコの話を聞いてみたい。

ウ　トーコではなく自分が悪かったのだから、素直に返事をしづらい。でもこのままトーコを無視するわけにはいかないから、とりあえず話はしてみよう。

エ　トーコが待ち伏せをしていたなんてあきれてしまうし、謝罪の言葉もしらじらしい。何も言い返さないでいるのも悔しいから、一言文句を言ってやろう。

問六　――線部⑦「悩んだり気になること」とありますが、それは「トーコ」にとっては結局何だったのですか。二十字以内で書きなさい。

問七　――線部⑧「胸がドキドキ鳴っていた」とありますが、それはなぜですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　勇気を出して穂香に本気で謝ったら、ようやく穂香が許してくれたから

イ　自分の思いを率直に話した穂香に対して、しっかり向き合おうと決めたから

ウ　トーコが自覚していた欠点が、穂香にすべて見破られてしまっていたから

エ　次々と言葉を繰り出してくる穂香の様子に、ひどく圧倒されたから

問八　二か所の［　　］には、同じ内容の言葉が入ります。どのような言葉が入ると考えられますか。五字以内で書きなさい。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、扉絵は省略します。また、問題文中の太字は原文の通りです。

強いテントウムシと弱いテントウムシ

本章の主役は二種類のテントウムシです。ナミテントウ（**本章扉絵**）はさまざまなアブラムシを食べて生活する身近な昆虫です。春になって暖かくなってくると、ユキヤナギやシャリンバイといった庭木、モモやクリといった果樹によく見られます。また、何百匹もの大きな集団になって冬越しすることでも有名です。

もう一種類の主役はクリサキテントウ（**本章扉絵**）です。ナミテントウと見た目は似ていますが、松の木（アカマツやクロマツ）にしか生息しておらず、そこにいるマツオオアブラムシを食べて成長します。また、成虫は春先の限られた期間にしか見られないため、虫に詳しい人以外はまず見たことがないでしょう。

ナミテントウのようにさまざまな餌を食べる種類をジェネラリスト、クリサキテントウのように特定の餌だけを食べる種類をスペシャリストとよびます。ナミテントウも松の木にやって来ますが、やはりメインの餌は、ほかの木にいるアブラムシです。そのため、二種類は大まかに「すみわけ」しているといえるでしょう。

しかしナミテントウとクリサキテントウの違いは、餌のメニューの種類や数だけではありません。ジェネラリストとスペシャリストの生活を反映してか、「めずらしさ」も大きく異なります。

研究を始めた当初、私はクリサキテントウが年に数匹くらいしか採れずにこまった思い出があります。ナミテントウは、がんばれば

一日に一〇〇匹以上も捕まえられるような、ごくありきたりな種類です。それに対して、クリサキテントウは一日中がんばって探しても、一匹も見つからない日もありました。それほどめずらしい種類です。「二種類のすみわけを調べたいのに、一方の種類しか見つからないようでは研究にならない」。私はそう思って、少しあせっていました。

しかしふり返ってみると、①「たくさんいるジェネラリスト」と「少ししかいないスペシャリスト」は、必然の組み合わせだったといえます。なにしろ、ナミテントウにはたくさんの餌があるからこそ、多くの幼虫が成長できるのです。[X]にクリサキテントウは餌の種類が限られているぶん、餌の量も限られています。そのため、ナミテントウのような勢いで増殖することはできません。

それでは、どうしてナミテントウとクリサキテントウは仲良く同じ餌を食べながら暮らしていけないのでしょうか？　これほどまでの「格差」はどのようにして生まれたのでしょうか？

私は、その背景にきっとケンカがあるはずだと思いました。というのも、昆虫の立場からすると、ナミテントウのようにいろいろな種類の餌を食べてたくさん卵を産んだほうがいいに決まっているからです。それにもかかわらずクリサキテントウは松だけにこだわっているのですから、ナミテントウと一緒にいると都合のよくないことがあると予想できます。

どうやら、ケンカに強くてさまざまな餌を好きなだけ食べる種類と、ケンカに弱くて限られた餌しか食べられない種類がいるのではないか？　ただ、②ここで言う昆虫の「強い・弱い」とは、一体何を意味しているのでしょうか。昆虫は握りこぶしでケンカをするわけではありません。まずは餌の食べやすさに注目して実験を行ないました。

A

昆虫の「強い・弱い」を決める要因としてまず思い浮かぶのが、餌をつかまえて成長する能力です。餌を上手につかまえられる種類は、それだけ効率よく成長して、数を増やすことができます。その結果、その他の種類を追いやってしまうでしょう。そこで、シャーレの中でナミテントウとクリサキテントウの幼虫にさまざまな種類のアブラムシを与えてみました。

その結果、「ナミテントウが強くてクリサキテントウは弱い」という証拠はまったく得られませんでした。どちらの種類の幼虫も、アブラムシをハンティングする肉食者です。そのため、どの種類のアブラムシであっても、それなりにうまく狩りをして、成虫まで発育できたのです。

おもしろいことに、クリサキテントウの幼虫は野外ではいっさい出会うことのないアブラムシであっても、シャーレの中で

は［Y］に食べて成長します。［1］、クリサキテントウがスペシャリストというのは、野外では松の木のアブラムシに特化しているという意味であって、潜在的に食べられる餌が限られているわけではなかったのです。

テントウムシの幼虫を飼育する場合は餌を大量に確保する必要がありますが、先ほど述べたように、松の木のアブラムシはそれほどたくさんいるわけではありません。そのため実際には、クリサキテントウが野外では食べることのないアブラムシを与えて飼育することがほとんどです。［2］、ユキヤナギに付くユキヤナギアブラムシ、クリに付くクリオオアブラムシ、カラスノエンドウに付くエンドウヒゲナガアブラムシなどを餌としてクリサキテントウの幼虫は順調に成長することができました。

［3］、アブラムシ以外の餌も飼育に使います。そのひとつがスジコナマダラメイガの卵です。このガの幼虫は米ぬかや小麦粉などを食べてしまう害虫で、成虫になると盛んに卵を産みます。その卵が、テントウムシやクサカゲロウをはじめとした肉食性の昆虫の餌として利用できることが明らかになり、飼育の上では欠かせない材料になっています。クリサキテントウの幼虫にもスジコナマダラメイガの卵を与えてみたところ、盛んに食べて成長しました。

以上のように、スペシャリストのクリサキテントウも本来はさまざまな餌を食べて成長できることがわかりました。つまり、餌をつかまえて成長する能力に差はなかったのです。すると、「野外でクリサキテントウの餌の種類が限られている理由」がますます不思議になってきます。そこで、餌の食べやすさそのものよりも、ナミテントウとクリサキテントウが直接出会ったときに何が起こるのか考えてみることにしました。

B

見た目や形のよく似た種類どうしなら、餌をつかまえて成長する能力に大した差はありません。これはテントウムシだけでなく、他のグループの昆虫でも指摘されていたことでした。しかし、よく似ているからこそ別の問題があります。それは、種類が違うにもかかわらず、交尾が起きてしまうリスクがあることです。

見た目が似ている種類と出会うと、どうしても自分の種類なのかどうか正しく判断できずに、間違えて交尾してしまうのです。しかし、間違えて別の種類のオスと交尾してしまったメスは、卵を産めなかったり、産んでも幼虫が孵化しないことがあります。

また、たとえ交尾が起きなくても、問題がないわけではありません。昆虫のオスとメスが出会うと、「相手は本当に自分と同じ種類のパートナーなのだろうか」というように、交尾するかどうかの判断に迫られます。このような状況は時間のムダといえるでしょう。

そんなヒマがあるなら、自分と同じ種類のパートナーと確実に交尾したり、餌を食べて栄養をたくわえたほうがいいからです。

害虫としても知られるマメゾウムシの仲間では、そんなムダが知られています。

＊

ア　他種のオスから「ちょっかい」を出されたメスは、卵を産む時間が減ってしまって、効率よく子孫を残すことができません。

イ　その結果として、アズキゾウムシと一緒のケースに入れて飼育していると、ヨツモンマメゾウムシはだんだん数が減っていき、やがては子孫がとだえてしまいます。

ウ　アズキゾウムシのオスは、よく似たヨツモンマメゾウムシのメスと出会うとしつこく追いかけ回します。

エ　このように、よく似た相手の種類の存在は生きていく上での「コスト」になってしまいます。

オ　また、逃げ回るうちに体力を消耗するためか、寿命も縮まってしまいます。

なわばりを張るトンボの例も紹介しましょう。オスのトンボは川沿いの明るい場所になわばりをつくって、なわばりにやってくるメスを待ちかまえたり、ライバルのオスがやってきたときは飛んで追い払ったりします。しかし、別の種類のメスがなわばりにやってくると間違えて求愛することがあり、メスにしがみついて交尾しようとします。これはメスにとってはいい迷惑です。また、別の種類のオスがなわばりにやってくると、本来はライバルではないはずなのですが、しつこく追いかけ回すことがあります。どちらの種類のオスにとっても、時間と体力のムダかもしれません。

以上のように、③よく似た種類どうしが出会うと大きなデメリットになります。ひょっとすると、求愛におけるこうした「ちょっかい」こそが、昆虫の世界におけるケンカの正体なのかもしれません。何か共通のものをめぐって争ったり、相手を倒そうと力をふるうわけではありませんが、相手の生存や繁殖にダメージを与えることから、二種類どうしの「ケンカ」と見なすことができそうです。

ただ、従来のケンカや競争のイメージとは異なるため、昆虫のすみわけとどのように関係しているのか、ほとんど調べられていませんでした。

（金子修治・鈴木紀之・安田弘法著『博士の愛したジミな昆虫』より、鈴木紀之「そっくりな虫どうしのジミな『ケンカ』――テントウムシのすみわけはなぜ起きる？」）

問一　［A］・［B］に当てはまる小見出しは何ですか。次のア～エの中から最も適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア　強さの秘訣は、グルメな食事？　　イ　じつは何でも食べられる？　スペシャリストの餌メニュー

ウ　ケンカの正体は、オスのちょっかい？　　エ　どうすればケンカをさけられる？　引き際のテクニック

問二　――線部①「『たくさんいる～スペシャリスト』」とありますが、このようになるのはなぜですか。六十字以内でわかりやすく説明しなさい。

問三　［X］・［Y］に当てはまる言葉は何ですか。次のア～オの中から最も適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア　一方的　　イ　対照的　　ウ　具体的　　エ　積極的　　オ　段階的

問四　――線部②「ここで言う～いるのでしょうか」とありますが、「昆虫の『強い・弱い』」を調べる実験と結果について説明した次の文章の［a］、［b］に当てはまる言葉は何ですか。本文中から［a］は七字、［b］は二十字で探し、書き抜きなさい。ただし、句読点は一字に数えます。

> ［a］に注目して実験を行なったところ、ナミテントウの幼虫とクリサキテントウの幼虫には、［b］ということがわかった。

問五　［1］～［3］に当てはまる言葉は何ですか。次のア～オの中から最も適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア　しかし　　イ　たとえば　　ウ　つまり　　エ　ところで　　オ　また

問六　＊部分のア～オの文を、意味がつながるように正しい順番に並べ、記号で答えなさい。

問七　――線部③「よく似た～になります」とありますが、その理由としてふさわしくないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　別の種類が間違えて交尾をしてしまうと、効率よく子孫を残すことができないから

イ　メスが別の種類のオスにしつこく追いかけ回されて、体力を消耗することがあるから

ウ　別の種類のオス同士でなわばりを争って、体力と時間を無駄に費やすことがあるから

エ　より優れたオスが劣っているオスを追い出して、メスを独り占めしてしまうことがあるから

三　次の①～⑧の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

① 飛行機をソウジュウする
② マラリアのコンゼツを目指す
③ ケワしい表情
④ シュクガ会が開かれる
⑤ 委員長のゾクトウが決まる
⑥ メンミツな計画を立てる
⑦ 期待にコタえる
⑧ オンコチシンの精神で歴史に学ぶ